

都市農地：市場の〈外〉にあることの贅沢



東京大学大学院 新領域創成科学研究科 教授 岡部 明子

■ デトロイトの放棄宅地

縮小都市研究チームのメンバーとして2011年・2012年にデトロイトを訪れた。そのとき、一口に都市農地といっても、自家消費が主の小さな無数の家庭菜園から大規模都市農場まで、多岐にわたることを知った(岡部2013)。デトロイトには、膨大な放棄された宅地が広がっていた。実に80km²におよび、東京山手線の内側の1.5倍もの面積だ。市場に見放された、市場の〈外〉にある。〈外〉だから、そこで人は、生産性や効率の呪縛から逃れ、何をしてもいい。

デトロイトは自動車メーカーのフォードのお膝元である。自動車工場など生産施設が市外に転出したときに、人口が流出した。この状況をビジネスチャンスととらえたのが大規模都市農業である。デトロイト在住の実業家ジョン・ハンツが始めた農場がその代表的な例だ。白人層が一斉に郊外に逃げたため、今では人口の8割が黒人であり、貧困層や失業者が多い。彼らに働く場と健康な食生活を取り戻そうとしているのが、社会事業としての都市農業であり、デトロイトではこれが主流といえる。なかでもミシガン都市農業イニシアティブ MUI は、大企業からの寄付で安定した活動ができている。

しかし、デトロイトの放棄宅地を舞台にした多様な都市農のなかでポスト資本主義の農のかたちへのポテンシャルが感じられたのは、大規模都市農業でも社会的都市農業でもなく、少量多品種を生産する小規模経営の農場のひとつを訪れたときだった。フードフィールド(Food Field)という農場で、20代半ばの二人の青年が、ランドバンクから小学校の跡地1街区弱(30宅地、1.2ha)を購入して2011年

に始めたばかりの農場だった。コミュニティ支援農業 CSA(Community Supported Agriculture)を軸とした小さな農業で、デトロイト都市農業の第三のかたちだ。CSAは会員制で、収穫物のあるシーズン中は、会員の人たちが毎週野菜バスケットを農場まで取りにくるしくみだ。私がフードフィールドを訪れた2012年夏時点での会員数は15~25程度、もう少し増やして30~40にしたいと語っていた。このほかにダウンタウンの有名レストランと契約があり、なんとかやっていけそうだと話していた。今日欧米の都市近郊農場で広がりを見せているCSAは、日本でも取り組まれるようになってきたが、実はそのルーツは日本にあって、1965年に始まった生活クラブの産直提携らしい。消費者のほうが生産者の立場として産地の農家と契約して農産物を共同購入するしくみであり、消費者運動として始まったものである。

■ 都市は農のフロンティア

フードフィールドを立ち上げたノア・リンク(Noah Link)は、まずアメリカ型の大規模農場で働いたという。しかし、生産性向上と効率化がすべての世界で、そこに農業の明るい展望を見出せなかったという。そして、農の将来を模索しつつ世界中を旅して巡った。辿りついたのが、デトロイトの放棄宅地での都市農業だった。

デトロイトの放棄宅地で始める農は、「自分の考え次第で、次々と新しいことにチャレンジできるのが楽しい」と、寡黙で細身の青年ノアは目を輝かせていた。彼にとって、農の真のフロンティアは、AI農業などではなく都市にあった。都市は、市場の

〈外〉でしかチャレンジできない農の創造的なイノベーションに開かれていた。

農場を訪ねたとき、彼は、農地の脇にある韓国製の青い中古コンテナから出てきた【写真1】。手っ取り早く雨風をしのげ、安かったから一台入手したのだという。ここが作業場兼倉庫、住まいで、街区全体の3分の1程度まで農地にしていた。ビニールハウスが一棟建っていた。最近、コンテナの上には木造の傾斜屋根を付けてみたそうだ。日射で内部が熱くなるのを緩和し、雨水を集める工夫である。「養蜂と養鶏を始めようと思っている」と控えめながら夢を語ってくれた。



【写真1】2012年7月、デトロイトでフードフィールド(Food Field)を始めて1年ほどのノア・リンク(Noah Link)を訪ねた

次なる環境整備は、オフグリッド(送電系統とつながっていない)・ソーラー発電。ハウス用の電力に使う。彼はすでにクラウドファンディングなどいろいろな方法で資金調達を地道に進めていた。「太陽光の少ない冬場の電力不足が懸念されるが、周りの住宅地の並木で薪は十分に集まるので暖房に不足はない」という。

彼の農場は、空き地の目立つ住宅地であって、決して治安のいいところではない。にもかかわらずフェンスも塀もない。誰でもいつでも立ち入ることができる状態になっている。「野菜泥棒もちろんいるが、近所の人たちと交わる場にしたいと思っている。フェンスをつくるには費用もかかるし。近所の人たちといい関係をつくっておくことによって、近所の目があることにかけてい」とかなりおおらかだ。帰りにタクシーを呼ぼうと思ったら、ノアが「そこにバス停があるよ」というので、バスに乗ったが、

同乗者たちの視線が結構怖かった。

■ 農地と宅地が隣合せ

デトロイトの都市農地は、不毛の荒野を耕すような決して楽ではない挑戦だ。それに比べてわが国の都市農地ははるかに好条件に恵まれている。そのほとんどが、そもそも農地で市街地が拡大してきても営農がたまたま続いているところである。現在、宅地と農地が混在する都市郊外が見られるのには、生産緑地制度によるところが多分にある。

しかし、生産緑地は当初、都市に農地を必ずしも積極的に位置づけたのではなかった。完全市街地化への過渡的措置であると同時に、都市公園など公共の緑地が十分に確保できていない問題を解消する苦肉の策の一面があった。日本の都市は、先進諸国の都市に比べて公園面積は少ないが、実質的に緑は多かった。そこで良好な農地を都市の緑地とみなし、それを営農者に維持してもらう分、固定資産税を減額するアイデアだった。すなわち、都市を支配する不動産市場の〈外〉に農地を位置づける制度だった。

生産緑地制度が機能した背景には、モンスーンアジア的な農地の生産性の高さがあった。西洋発の都市計画では、都市と農村の対比の構図を所与とするが、東南アジアや日本のようなモンスーンアジアの風土では自明ではない。日本を含め稲作文化圏では、人口が相対的に集積し、都市と認識されているところの周りに、生産性の極めて高い水田が広がっている。水田地帯の人口密度が、欧米の都市郊外以上に高い。地理学者T.マッギーがデサコタ(デサは農村、コタは都市の意味)と名付けたとおりである(McGee 1991)。欧米都市のように特段の都市基盤整備を行わなくても、水田地帯に暮しながら都市的な仕事に従事することができる。東京近郊でも、専業農家が兼業になり、いつの間にか不動産業が主な収入源になっていったように、アジアでは、欧米的に言えば農村のように見えていたところが、人間の作為で都市化しなくても、勝手に都市のようなものに突然変異していく。農地が宅地化していき、農地と宅地が隣合せになる定めにあるのであって、決

して、よくいわれるように計画が徹底していないからではなかった。

■ コロナ禍の庭先直売

縁あって、小平市の都市農地についての調査研究に関わったことがある(小平市 2017)。東京西部の郊外に位置する小平市は、江戸初期に玉川上水がつくられて畑作可能な土地になり、小川村が生まれた。小川村の人たちは、玉川上水と並行して走る青梅街道を東京まで移動して野菜を届けていた。青梅街道と直交して細長い地割で路村開発され、その短冊農地のパターンが今日に引き継がれている。間口 30m ほど、南北に長く 1km におよぶ細長い土地には、青梅街道に面して家屋を建て、どこまでも畑地が続き、その先に雑木林があった(小平市 2012)。枯葉を腐葉土に使わなくなって雑木林から宅地化していった。それぞれの短冊の事情で徐々に切り売りされ、今では宅地と農地が縞模様をなしている【写真 2】。農家数は 50 年前に比べると半減したものの、現在でも 339 戸の農家が残っている。



【写真 2】小平市では、短冊農地の名残で、農地も宅地群も南北に細長い(撮影:近藤雅貴)

道を歩いていると、庭先直売所が目につく。農家さんが近くの畑をもたない住人たち向けに農作物を販売している。直売所は 127 箇所あるというから、農家 2、3 軒に 1 軒が庭先販売をしている計算になる。

そして、コロナ禍の夏、ナスやピーマンやきゅうりなどの夏野菜がいつもより多く売れたという。不意に移動を自粛する状況に追い詰められて、いちばん安心できるのは、当面生きていくのに欠かせない食料や生活必需品を自給できていることだ。しかし、長年便利に安住し、いつしか生活に必要なものはな

んでも買えばすぐに調達できると信じて疑わなくなっていた私たちは、今日の明日に自給はできない。そこで、歩いていける範囲で、対人接触をなるべく避けて必要なものを手に入れようと、誰もが生活行動を試行錯誤していった。商店街の小商店が見直されるようになったという。同様に、無人の庭先直売所の前を通りかかると、つい足がとまるというわけだ。

■ 農は贅沢

2017 年、小平市の短冊農地を対象とした課題に、建築学科の学生たちに取り組んでもらった【図】。彼らの提案のひとつに「農は贅沢」という言葉があった(岡部 編 2019b)。時代は変わった。ひところ前までは、畑仕事は「田舎くさい」と恥ずかしいものだったが、都心のマンション族にとって親子で土いじりは今やおしゃれだ。高級そうなこだわりの八百屋さんでは、土の感じられる農作物が胸を張っている。お金を払って農作業するニーズの存在が、至れり尽くせりの「シェア畑」のような貸農園新ビジネスにつながっている。

こうしたトレンドには、農や田園を美化する趣向が垣間見られ、ロマン主義に遡ることができる。美しい農の風景は額縁に入っている。一方ではお金を出して「おしゃれな土っぽさ」を買おうとしながら、自宅に隣接する農地からの土埃や臭いについて、農家さんに容赦ないクレームを浴びせる。都市住民を対象とした居住地選択についてのアンケート調査によると、「自然の豊かさ」を重視する人は 7 割を超えるが、「農地」を重視する人は 2 割にとどまる(福塚 2019)。さらに自然重視を選択した人の半数は、農地を重視しないと回答している。大多数の都市住民にとって、農は、美化されたものであり、お金で手に入る、市場で調達できる贅沢といったところだろうか。

しかし、贅沢とは、贅を尽くすとは、手をかけたものであり、そもそも効率の悪いもの、無駄なものだ。コロナ禍は、私たちは近くに農作物の育つ畑があることの大切さに気づかせてくれただけでなく、真の贅沢とは何かを考える機会となった。



図：2017年、東京大学の建築学科3年生が、小平市の短冊都市農地を対象に、東京郊外における農のあり方を提案した。図は提案をまとめた冊子の表紙。

都市にある農地は小規模で、固定資産税を優遇されたぐらいでは、農作物市場での競争力を維持できない。もっとも、地の利と顔の見える生産者が手をかけた東京育ちの野菜であることをブランド化して都心のレストランに販路を拡大している優良営農者もいるが、ニッチなマーケットであり効率的な営農にはならない。それが、コロナ禍で、いつもの無駄がもしもの必須、都市農地の冗長性の価値が顕在化した。自宅の隣地で農作物が育っている安心に、市場で調達できる浅薄な贅沢を超えた、農地が市場の(外)にあることの贅沢を少しは感じるようになったのではないだろうか。

■ 映画『人生フルーツ』

私は都市農地問題にとくに詳しいわけではないが、編集委員を務める『地域開発』誌で2019年に「農の見える都市的ライフスタイル」という特集を担当した(岡部 編 2019a)。編集委員会の席で、メンバーで地域経済が専門の松永桂子さんが、家庭菜園を始めたと知って、その場の勢いで一本書いていただくことにした(松永 2019)。いただいた原稿を読んでみてびっくり、彼女のキッチンガーデンは、想像した以上に本格的だった。オクラは4本立ちにするとしなやかな柔らかい実ができる、キュウリは6番目の節から上をカットして子づるを伸ばして育てる、腐葉土は家の側溝に溜まっていたものを利用する……。彼女が家庭菜園をしてみようという大きなきっかけになったのがドキュメンタリー映画『人生フルーツ』を観たことだ。「思想に影響を与える映画は少なくないが、行動に影響を与える映画はなかなかない」という。確かにそうだ。

このドキュメンタリーは、高蔵寺ニュータウン(愛知県春日井市)の設計を担当した津端修一さん(90才)とその奥さんの英子さん(86才)の老夫婦の生活を追っている。彼らは高蔵寺ニュータウンのはずれに300坪の土地を買い、師である建築家レーモンドの思想を体現した家を見て、雑木林の枯葉を集めて畑に鋤き込みその実りをいただき、ていねいな暮らしを実践している。1960年代、建築家として、ここにニュータウンを計画するにあたり、昔からあった雑木林を生かそうとしたものの、実現できなかったことへのささやかな償いでもあった。手をかけ、自然の理に身を委ねて初めて手に入る贅沢な暮らしである。

風が吹けば、枯葉が落ちる。

枯葉が落ちれば、土が肥える。

土が肥えれば、果実が実る。

(映画「人生フルーツ」より)

そして修一さんは「畑の草むしりをした後 昼寝したまま起きてこなかった」。なんと贅沢な死のことか。誰もがあこがれる人生の終わり方である。でも、いくらお金を出しても買えない贅沢だ。

■ ダークエコロジー

『人生フルーツ』を観て、私はパール・バックの名作『大地』(1931年)の一節を連想した。土を耕していると、過去の人たちの欠片に遭遇する。その土地を耕しそこに暮らした人たちの家も、そして彼らの肉体も、いつの日か土に還り、土を肥やす。後世の人たちに、肥えた土を残す。水稻が自生し、稲作が自然に生まれたであろう揚子江沿いのゆるやかな起伏のある湿った中国の土地で、人間が導線と

なるすさまじい生態系に放り込まれた気がした。美化され客体化されたロマン主義的な自然ではなく、私たち人間もともに循環する生態系である。モートンのいう「ダークエコロジー」である（モートン 2007=2018）。

そこには、自らが生命ある動物的身体であることを受け入れる境地を手に入れた人たちが、迎えらるる贅沢な死がある。動物的身体に背を向けては、決して到達できない死。しかし、現実には、生命ある生き物であることに身を委ねれば、疫病に感染しものがき苦しむ死が待っているかもしれない。『人生フルーツ』の修一さんのように、畑仕事の後のひと休みのままあの世に旅立てる死は、たまたま運よく迎えられるとも贅沢な死である。

松永さんは、「ちょっと野菜づくりをただで、土と人の命のつながりを実感し、人生が変わるような気がする。ちょっと大げさかもしれないけど」という。私たちが土と切り離されてしまっていることに気づかされ、極論すれば「人間を含む貪欲な多種たちの賑やかな吹き溜まり（東 2020）」にまみれて生きたいという感覚かもしれない。そもそも人間を外部化した自然環境など本当はなく、あるのは「都会を含むすべての大地と、そこを起点として水と空気が循環することで息づく環境全体」だけだ（高田 2020）。

都市農地には、地球環境を守らなくてはならないという教条的な学習の場としての農の体験の対極で、もっと根源的な動物的身体からくる渴望の受け皿が求められているのではないか。

そういえば、6年前にデトロイトで会ったノア青年はどうなっているだろうか。ひょっとしてもう消えているのではないかと思い、2018年に一度ネット検索してみた。すると、2012年に描いていた夢物語をことごとく実現させていた。養鶏場、養蜂箱、そして養魚場までできていた。なまずとブルーギルを養殖している。フィッシュバーガー用のテラピアは熱帯の魚で光熱費がかかるからやらないとのこと。コンテナひとつだった住まい兼作業場は、増殖

していた。サイクリングの小休止に立ち寄った人たちと談笑している写真もあった。木陰に緩い円弧を描く長テーブルに純白のテーブルクロスがかけられ、50人を超える人たちが席について畑の実りを食している【写真3】。「農という贅沢」とはこういうことだろうか。最近ではコロナ禍での農場オープンエアコンサートをやっている。目を見張る発展ぶりだ。ただそれは「農の創造性」が商品化されていたプロセスでもあったといえよう。



【写真3】プロの料理人を招いて、フードフィールド農場でディナー（2017年8月）
(<https://www.facebook.com/foodfield/>)

そして、ノア・リンク氏本人は、フードフィールドを2019年に去っている。10年ほど前に訪れたとき、遺棄された都市デトロイトでは、何でもありに思えた。大規模農業においてAI化が進むなか、ダークエコロジー的な農の、近代の業であることを超えたフロンティアの予感を、私は勝手にフードフィールドに抱いた。最近の地元の記事（<https://detroitisit.com/urban-farming-struggles-to-mature-in-detroit/>）のなかで、リンク氏は「寄付を財源とする MUF1 モデルの影響で、都市農園の作物はタダであることが常識になってしまった」と嘆いている。寄付がかすがいとなって、社会的都市農業が資本主義システムに取り込まれ、市場の〈外〉の放棄宅地であっても、以前ほど自由奔放な農の挑戦が許されなくなったのだろう。

生産緑地制度は、市街地にある農地に、都市の土地市場の〈外〉に居場所を与えた点で画期的だったと私は思う。今回の生産緑地法改正では、農家レストランができるようになるなど一見都市農に自由度が増したように見える。しかしそれは、都市に農地をもつ農家に、ビジネスとして成立する都市農業

を期待していることでもある。「農という贅沢」の商品開発である。都市農地を市場に包摂する方向である。これが、消費される贅沢、すなわち浅薄な贅沢なのに対して、デサコタ的風土の必然から存在する日本の都市農地には、もっと深淵な贅沢が潜在している。人間の動物的身体が土に還る実感を取り戻す贅沢である。そこに、市場の〈外〉にあることによる深淵な贅沢がある。私はそれを、都市農地に貪欲に諦めずに求めていきたい。

引用文献

McGee, T G (1991). The Emergence of Desakota Regions in Asia: Expanding a Hypothesis. In N S Ginsburg, B Koppel and T G McGee eds, *The Extended Metropolis: Settlement Transition in Asia* (Honolulu: University of Hawaii Press). pp. 3-25.

東千茅 (2020) 『人類堆肥化計画』 創元社

岡部明子 (2013) 「都市縮小の先端を走るデトロイト最新事情 (2) 本格化する都市農業」『地域開発』 v585 48-52 頁

岡部明子 編 (2019a) 「特集：農の見える都市的ライフスタイル」『地域開発』 v628

岡部明子 編 (2019b) 「特集 2: 『プチ田舎』 こだいら」『地域開発』 v629 54-70 頁

小平市 (2012/01) 「こだいらちょっとむかし」『市報こだいら』

小平市 (2017/03) 『地方創生総合戦略推進のための都市農地に係る調査研究報告書』 小平市企画政策部政策課

高田宏臣 (2020) 『土中環境』 建築資料研究社

福塚祐子 (2019) 「都市農地を活かした多様な『都市+農』的ライフスタイル」『地域開発』 v628 7-11 頁

松永桂子 (2019) 「ライフスタイルとしての都市の農」『地域開発』 v628 64-68 頁

モートン, T. (2007) 篠原雅武 訳 (2018) 『自然なきエコロジー』 以文社